

病院で会った 霊たち

入院10回以上の「ぼく」
が語る随想風怪談

choji

お隣の声(1)

「ここは病院ですよ」

わたしが、今までの生涯で最初の「霊体験」らしきものをしたとき、その「霊」の話をしたら、微笑しながらそう答えたナースを思い出すことがあります。

まだ高校2生の春のことです。

当時住んでいた市の市立病院に、一か月以上入院していました。

病院の「造り」は、廊下を仕切りにして南側が大部屋、北側が個室です。

一番西側に階段とエレベーターがあり、その手前にナース・センターがあります。

(患者が勝手に病棟を出ないように監視の意味もあるでしょうね)

わたしなどよく、点滴棒(移動式になっています)を持ったまま一階の売店に出ようとして、ナースに怒られました。

わたしは個室には行っていません。

個室にはいる患者は、重病の方ばかりです。(わたしもかなり重病でしたが、本人にあまり「重病」意識がありませんでしたw)

重病ですから、そのまま助からずに「死んでしまう」方も多いのです。

お隣の声(2)

わたしは一番西側の個室でした。

隣（東側）の部屋には、かなり御高齢(ごこうれい)の御婦人が入室されていました。

人が年を取るといふことの残酷さを感じさせられました。

市立病院の個室の壁は薄いので、唸り声や叫び声が、一日中聴こえていました。

わたしは夜眠れないので、導眠剤をもらっていました。

それでも夜、あまりに騒がしいので、起こされてしまったこともあります。

やっと点滴から解放されて数日のこと・・・

廊下に出てみると、お隣の老婦人が、はいつくばって部屋から廊下に出てしまって、ナースたちがなんとかなだめようとしていました。

おぼつかない口調でしたが。。。

「家に帰らなくてはならない」

「嫁。。が。。どうのこうの」

というようなことを言っていたと思います。

可哀そう。

と思うより、今は高校生のぼくにも、いつかそんな日が訪れるのかな？

「いやだな～」

と、暗い気持ちになりました。

お隣の声(3)

それから数日後の夜明けごろのことです。。。

外がまた騒がしいので、起こされて、部屋からでてみました。

大部屋は東西に分けられていて、廊下がその中心に張り出すようなカッコウで、簡単な応接や休息が出来るようなスペースがあります。

ソファがおいてあり、本や雑誌もおいてあります。

そこに、医師や看護師や黒い洋装をした方々(御家族の方でしょう)、それに「お坊さん」まで集まっていました。

導眠剤のために頭がボーッとしていたので、そのままベッドに戻って眠ってしまったのですが、次の日、隣の部屋を見てみたら、ドアがあけ放たれていて、病室の（患者）ネームが枠からはずされていました。

隣の老婦人が、亡くなったのだということをぼくは知りました。

奇妙な出来事を経験したのは、病院の消灯時間が過ぎてからのことです。

お隣の声(4)

その夜は静かに過ごせると思ったので、導眠剤はもらいませんでした。

ところが少しまどろんでいると、またあの「うめき声」や「叫び声」がしはじめたのです。

目をさましたわたしは、眠れぬまま仕方なくベッドに横になっていました。

「ドンドン」

と。。

壁を叩（たた）く音さえきこえます。

「幽霊」

だの

「霊魂」

だの、頭から信じていなかった私は、

「さすが市立病院。ドライなものだな。もう新患者を入室させているのか。。。」
とっていました。

それが。。。

翌朝のこと。。。

わたしは、びっくりさせられました。

隣の部屋は、ドアが開け放たれてい、中はガラーンとした空室のままだったのです。

お隣の声(5)

空の部屋の、患者ネーム枠にも、もちろんネームは、はいていませんでした。

考えてみれば、掃除（そうじ）やベッドの交換もせずに、死亡者の出た部屋に、新しく「患者」をいれるなどということは、いくら市立病院でもやるはずはありません。

では。。。

いったい？

昨晚、「聴（き）いた声」や、「壁を叩く音」は何だったのか？

自分自身は、はっきり目をさましていると思い込んでいただけで、実際は、眠りにはいる前の幻聴（げんちょう）だったのでしょうか？

それとも、病院の霊安室（れいあんしつ）に安置されているはずの、老婦人の魂魄（こんぱく）が、まだ病室に残っていて、いわゆる騒霊（そうれい・・・さわぐ霊）となって、うめいたり壁をたたいたりしていたのでしょうか？

わたしには、あの夜は、どうしても眠れず、はっきり目をさまして
「お隣からの声や音」
を「聴いていた」という記憶がありました。

「怖い」

とは思いませんでしたが、釈然（しゃくぜん）としない気持ちは残りました。

お隣の声(6)

わたしは、この話を、ナースにしてみました。

「何いってるのよ。幻聴（げんちょう）に決まってるわ。気のせいよ」
という「答え」が返ってくるのを期待していたのかも、知れません。

しかし。。。

ベテランのナースは少し微笑んで、

「ここは病院ですから」

と、言い残して出て行ってしまいました。

半分冗談でいったのでしょうか。

けれど・・・

半分は、本心だったのかも知れません。

「ここは病院ですから」

入院中にその言葉の意味を、知ることになりました。

サンダルの響き(1)

さて、5月の連休のことです。

この時期になると病院は、退院もスタッフが休みをとる関係もあるのでしょうか。

その前に退院させてしまう患者が多くなります。

また、比較的軽症の患者さんは、自宅療養（じたくりょうよう）が許可されます。

スタッフも減り患者も減り。。。

連休にはいるとガラーンとしてしまいます。

特に大部屋の方は、「軽症者」が多いですから、ガラ空（あ）き状態です。

かなり、わたしの体調もよくなってきましたが、まだ「自宅療養」という許可はもらえず病室に残っていました。

そんな連休中、わたしは再び、例の大部屋を東西に仕切る「休息室兼応接室」からの声で目覚めさせられることになったのです。

部屋から出て見ると、まだ若い頭髪を赤く染めた、屈強（くつきょう）そうな青年患者が、ソファに腰掛けていました。（たぶん身長は180センチは超えていたでしょう。体もガッシリした、肉体を駆使して働いているようなタイプに見えました）

異様でした。

その足元にナースがひざまづくようにして座り、その青年を「かきくどいている」ように見えたのです。

患者とナースの「恋」？

いえいえ。

そんな甘い雰囲気でないことは、高校生だったわたしにも、一瞬でわかりました。

青年の顔が、青ざめていたからです。

恐怖の色だと、はっきりと感じ取れました。

サンダルの響き(2)

わたしは、いかにも「夜、目が覚めて退屈で雑誌か何かを探しに来た」という風情を装（よそお）って、ソファのあるスペースに、出てみました。

二人は、うろうろしている少年のことなど気にもとめる様子はありませんでした。

若い患者さんの足元で、ナースが何かボソボソと、話している声が聞こえました。

「。。。ですから、部屋を西側（どうやら東側の大部屋にいた患者さんのようです）に移っていただけます。。。。

「そうすればナース・ステーションからも近くなりますし」

「いやなんだよ。もう、出ていきたいんだ」

「もう真夜中ですし。それは無理です。先生に頼んで、よく眠れる薬をもらってさしあげます」

「眠れないよ。眠ってしまうのも怖いんだよ」

患者は、まるで子供のような口調でダダをこねていました。

「。。。。そう言われても。見回りも、何回も行くようにしますから」

ナースはこまった様子で患者を見上げました。

わたしは「本だな」を見ているふりをしながら、患者の斜め前に出て、横目で、彼の顔をチラリと見ました。

患者は、かすかにふるえていました。

宙を見るように定まっていない視線が、きょときょとと揺（ゆ）れていました。

サンダルの響き(3)

患者さんは自分に何が起きたかを説明しはじめました。

おそらく何度もナースに訴えたのでしょう。

恐怖におびえているとはいえ、短くよくまとまった話でしたので、ぼくは、はっきりと覚えています。

若い患者さんの話は次のようなものでした。

なるべく、記憶通りに書きます。

(ちなみに大部屋のベッドとベッドの間はカーテンで仕切られています。

このことは入院したかお見舞いに行った方は、よく知ってらっしゃると思います。

どうかカーテンで仕切られたガランとした病院の大部屋の情景を頭に描いて聞いてください)

「隣のベッドの奴が、何度も何度もトイレに行くんだよ。。。そのたびに布団（ふとん）をはいで、スリッパの音をさせる。

しばらくすると、また、ペッタペッタ、ペッタペッタ、音をさせて、ベッドにもぐりこむ。いったい何回トイレに行くんだ！と、腹がたったけれど、おれも最初はガマンしてたよ。

。。。だけど。。。

ガマン出来なくなった。

頭にきて、ペッタペッタ音がして、そいつが、かえって来たみたいだから、(仕切りの)カーテンを開けたんだ。

そうしたらそうしたら。。。

そ、それが。

誰もいないんだよ」

若い患者さんの声は、低くボソボソした口調でしたが、今にも泣き出し叫びだしそうにな響（ひび）きを感じさせるものでした。

サンダルの響き(4)

「ですが。。。今、病院としてやれるのは、ベッドをかえてもらうくらいで。。。」
ナースは一生懸命、若い患者さんを、なだめていました。

「いいよ。おれは今晚ここ（ソファ）ですごすから」
患者さんが、地の底から聞こえてくるような暗い調子で答えました。

いつまでも「聴き耳」を立てているわけにもいかないので、適当な雑誌を手にしてわたしは、自分の部屋に戻りました。

その夜は、部屋に戻ると、不思議とすぐに眠ってしまいました。

朝、部屋から出ると、さすがにもうその患者さんは座っていませんでした。

それからまだ10日ほど、わたしは、入院したままでしたが、頭髪を赤く染めたその「若い患者さん」と顔を合わせることはありませんでした。

退院してしまったのかも知れません。

この話は、わたしが話したわけでもないのに、連休が終わって戻ってきた患者さんの間でも、すぐに「うわさ」になってしまいました。

その「うわさ」話では。。。。

何でも、若い患者さんの隣のベッドに入院した患者さんは、「お酒」をたくさん飲んだあげく、肝臓を悪くした中年の男性がはいっていたそうです。

連休中、医者に止められたのに、
「どうしても」
と、頼んで、自宅療養を許されたのだそうです。

家に戻ったその患者さんは、

「家では絶対にお酒を飲んではいけない」

と、医師に注意されていたのに、家の人には黙って外に出て行って、居酒屋にはいり、大量のお酒を飲んだのだそうです。

そして、朝方、道端に倒れているところを発見されて救急車で運ばれる途中で亡くなったそうです。

サンダルの音は、幽界とこの世の間にあった、中年の患者さんの、生霊だったのでしょうか？
わたしはそれから一週間くらいしてから退院しました。

その「うわさ」も、わたしが退院する頃には、ずいぶんと下火になっていました。

ジnkス

わたしは、この入院をきっかけに、その後、何度も入院を経験することになってしまいました。

個室にはいり、その隣の方が亡くなるという経験を二度しています。
いわばジnkスみたいになってしまいました...

霊体験？

ええ、病院ですから。

いちいち、驚いてはいられません。

今は、一応、入院する予定はありませんが。。。持病が重くなればどうなるかは、分かりません。

皆さんが健康であることを祈ります。

そして、もし病気になって入院しても、わたしの隣や近くの病室には、はいられないことをお祈りします。

(おわり)